FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2000.9.30
No.38

イラスト／「祇園祭」（裏表紙参照）

新しい地域博物館をめざして

～歴史博物館へのリニューアル構想～

笠松雅弘

福井県立博物館は、平成15年に（仮称）「福井県立歴史博物館」として生まれ変わる。
自然系の恐竜博物館の独立を契機に、人文系の歴史博物館として再スタートをきるわけであるが、
これまでにない新タイプの地域博物館をめざして、大きな変貌をとげようとしている。
歴史博物館へのリニューアル構想におけるセールスポイントを、学芸員の立場から紹介したい。

フレキシブル展示

まず、第一のポイントは、「フレキシブル展示」という新しい展示システムの導入にある。これは、つねに常設展示に新しい命を吹き込むように、年々展示替えを重ねるための手法である。

わが国の博物館の常設展示は、ひとたび開設すると長く固定するのが一般的であった。１年や２年で展示を変更することはなく、10年や20年をまって大規模な刷新を計画するところが多い。したがって、常設展示は年を追うごとに色あせてゆき、地元の利用者が何度も足を運ぶほどの魅力は保てなかった。そこで、その弱点を補うように頻繁に特別展を開催し、入館者の確保をはかる努力が重ねられてきたのである。

また、常設展示を固定化することは、リピーターが得にくいという弱点ばかりでなく、日常的な学芸員の活動が常設展示に結びつかないという問題を引き起こしかねない。膨大な時間や費用をかけて、いったん完備された常設展示に手を加えることは容易でない。会場全体のデザイン、つまり観覧導線やテーマ構成、資料配置のレイアウト、さらには解説パネルのグレードなど、変更を行うには多くの問題をクリアーしなければならない。新しい資料やテーマが見つかったり、研究がいっきに進展しても、常設展示にすぐさま反映することは困難である。できても木に竹を接ぐような追加展示になることが多い。そして、年々古びていく常設展示には、学芸員ですら魅力を感じられなくなるのである。

この深刻な問題を解決するために、「フレキシブル展示」システムの導入をはかった。「石器・土器」や「越前焼」「絵馬」「絵図」などという、10のテーマからなるフレキシブルコーナーは、毎年２か所でテーマと展示品が変更され、10年間にはすべてが何度か入れ替わるという計画である。こうして常設展示は、つねに新鮮さを失わず、個々のテーマは全体の流れをこわすことなく、いつでも変化をとげる。したがって、観覧者は毎年異なる常設展示をみることができ、10年間にはふくいの歴史と文化に関連の深いテーマ（モノ）を総覧できることにもなる。「フレキシブル展示」こそ、オープン当初の一過性の華々しさより、たとえシンプルでも長期間にわたって魅力を失わないことに重点を置いた手法といえる。

さらに、学芸員の立場からいえば、資料収集や調査研究などの日常的な活動成果をいち早く常設展示に反映できるという利点がある。常設展示と特別展との垣根はずっと低くなり、特別展だけが最新成果を披露する場ではなくなる。この取り組みは、ある意味で大きな冒険であり、たいへんな労力をともなうものであろう。しかし、常設展示における「フレキシブル展示」の運営は、今後の地域博物館のあり方をさぐる大胆な実験として、真に意義深いものと考えている。

ただし、その実現のためには、まさしくフレキシブルな展示環境を整備しなければならない。可動式の展示ケースや移動壁、自由自在にパネルを貼れる多孔ボード、さらには多目的に使えるライティング装置など、多種多様な展示を可能にする環境づくりが不可欠である。現在、その内容について詳細な検討作業が進められている。

モノを中心とした展示

つぎに、第二のポイントは、博物館の展示の原点といえる「モノ」の展示にこだわりを持つという点である。これまで自治体博物館の歴史展示は、通史（歴史の流れ）に合わせてモノを配列することが多かった。どちらかといえば、‘モノを見せる’というより、モノを使って‘歴史の流れを説く’ことに主眼があったといえる。歴史という背景があって、はじめてモノ（歴史資料）が理解できるというわけであるが、歴史の流れにとらわれすぎると、モノ自体に意識が向かないという問題が生じる。極端な場合には、モノがなくてもそれに代わるパネルやレプリカを駆使して、なんとか通史を成り立たせようとすることもある。本来、博物館の展示としては、主客転倒の姿であろう。ちなみに、オープン当初のわが館も、これに近い状態にあった。

モノは、さまざまな情報をもっている。歴史的背景も重要だが、博物館にあっては、モノ自体にもっと目を向けるべきではないか。少し例をあげれば、江戸時代の展示に浮世絵がよく使われる。描かれた絵から過去の地域の景観や特産物などがよく紹介されるが、木版画としての製作技法や材質・材料（紙や絵具）などについて語ることは少ない。同じく江戸時代の古文書についても、内容の読み下し文はあっても、使われている紙や墨などの問題にふれることはあまりない。また、必ずといってよいほど歴史展示の入り口部分に置かれる縄文土器などにも、同じようなことがいえないであろうか。

こうした傾向は、わが国の多くの自治体博物館が歴史の流れを追うことに中心をおき、モノをあくまで副次的に配置しているにすぎないからである。この場合のモノは、あたかも年表に付属掲載される写真程度にしか考えられていないとさえ思われる。

歴史博物館は、あくまでも博物館である。歴史の叙述をメインテーマに据える「歴史館」とは微妙にニュアンスがちがう。博物館は本来、さまざまなモノを取りあつかう専門機関であり、歴史学の関心ばかりでなく、モノの展示や分析・保存科学の観点からも積極的にアプローチすべきである。学芸員もそれゆえに「学芸員」と呼ばれるのである。リニューアルにあたり、私たちはモノ自体への関心をいっそう高め、展示のあり方についても原点に立ち返って考え直すべきであると考えている。

抽象的ないい方になるが、モノが見やすい展示、感性に訴えかける展示は、どうしたら実現できるのか。独りよがりな展示、押しつけがましい展示にはしたくない。見る側の関心や好奇心の度合いに応じて、自由に受け取ることのできる展示とは、どういうものなのか。さまざまなケースを想定しながら、いま学芸員の間でも種々の議論が重ねられている。

ワイドテーマの設定

さて、第三のポイントは「ワイドテーマ」の設定である。

ここで、少しリニューアル後の展示施設について説明すると、会場は二つの大きなゾーンに分かれる予定である。一つは、「原始・古代」「中世」「近世」「近代・現代」という時代区分のなかでテーマ（固定のものとフレキシブル）を立てる「通史ゾーン」、もう一つは、特定の時代や「ふくい」という地域に限定しない大きなテーマ（フレキシブル）を立てる「企画ゾーン」である。前者「通史ゾーン」は「ふくいの歴史ゾーン」、後者「企画ゾーン」は、やや大げさだが「ユニバーサルゾーン」と呼びかえてよいかもしれない。

ただし、「通史ゾーン」においても、やはりできるだけモノを中心にした展示を心がけるつもりでいる。とくに、フレキシブルコーナーのテーマには、「石器」「土器」「越前焼」「絵馬」「絵図」「古文書」などといった、モノに焦点をあてたタイトルを選ぶ予定である。

観覧者は、「通史ゾーン」と「企画ゾーン」のどちらから見はじめてもかまわない。ちなみに、二階にあがってすぐの入口を進むと、「通史ゾーン」が現代から古代へとさかのぼっていく。もちろん、反対側の入口にまわって、従来のように時代の流れに沿ってみていくこともできる。しかし、今後の「通史ゾーン」の主導線は、現在に起点をおいて過去へと向かう流れにしたいと考えている。歴史はつねに現在の視点から過去を見つめるもの、という考え方を観覧導線にも取り入れてみようと思うからである。

そして、このもう一方の「企画ゾーン」に「ワイドテーマ」を取り入れる予定でいる。ここでは、時代や地域の制約をはずして見た方がわかりやすいモノ（テーマ）を展示しようというのがねらいである。リニューアル当初は、「日本海海運」と「住まいと環境」という二つのコーナーを設置することになっている。

たとえば、「日本海海運」のコーナーでは、中世から近世を通じ、近代（明治期）までさかんであった海運に関わるモノを一堂に集めて展示できればと考えている。さらに、海運によって日本海沿岸に広がったさまざまな文物をならべる予定で、瓦や笏谷石などのふくいから遠隔地に運ばれたものや、また、その反対に木材や海産物など当地にもたらされたものを紹介したいと思っている。こうしたさまざまなモノの展示を通して、これまで近世という時期や、越前・若狭という特定の地域に限って取りあげてきた問題を、より大きな視野をもって見直すことができればと考えている。

なお、個々のモノの展示のあり方も、これまでとはちがった工夫を施す必要があるわけで、担当学芸員の肩には、まさしくワイドでヘビーな課題が与えられている。また、この「ワイドテーマ」は、先に述べたフレキシブルコーナーの一つに位置づけられており、おおよそ5年後にはテーマの変更を行うことになる。その計画も立てておかなければならない。

このようにテーマ設定の幅を広げることは、とりもなおさず資料収集や調査研究の幅を広げることである。フレキシブル展示におけるテーマ構成もそうだが、県立施設の博物館としては、視点と対象、活動範囲の広さという点で、その存在意義をアピールできれば幸いである。

オープンギャラリーの開設

つづく第四のポイントは、同じく「企画ゾーン」に設置を予定してる「オープンギャラリー」である。このコーナーは、これまで学芸員が中心に行ってきた展示会を、希望する利用者と学芸員とが共同で行う場にしたいと考えている。利用者がすでに与えられた展示を見るだけでなく、自らが中心となって展示を企画、実行するための自由で開放的なスペースにしたい。

ここでは、テーマをあまり限定せずに、できるだけ自由な発想を尊重して企画展示を行いたいと思っている。近年、「参加型の博物館」ということがよくいわれるが、何に対してどのような内容の参加体験を行うかが問題である。この「オープンギャラリー」では、企画展示の開催準備、具体的には資料の調査や収集、解説パネルの作成作業など、それから実際の展示、さらには会期中の展示案内など、展示会を開催するにあたっての一連の作業を参加体験できるわけである。もちろん、すべてを行うことが不可能な場合は、部分的な参加でもよい。参加者の主体的な活動を支援していきたい。

こうした「オープンギャラリー」の運営は、学芸員にとっても貴重な体験となり、学ぶべきことが多いであろう。また一方、少しでも多くの方々に、博物館の活動を理解していただく機会になれば幸いである。

収蔵展示の試み

そして、第五のポイントは「収蔵展示室」の設置である。収蔵展示とは、資料（モノ）を収蔵したままの状態で見せる展示のことをいう。近年はこれを行う博物館も少なくない。その魅力は、何といってもモノの量であり、また、ガラスケースを通さない‘生’の展示の迫力であろう。事情があって、ときおり一部の利用者を収蔵庫に案内することがあるが、扉を開けて棚いっぱいに並んだモノの集団を見て、圧倒されない人はいない。そんな経験をもとに、多くの利用者の方々にモノの宝庫である収蔵庫が開放できればと考えるようになった。しかし、実際に収蔵庫を開放することは、資料の保存管理の上で不可能である。そこで、収蔵展示室の設置が検討されることになった。

収蔵展示室の施設は、できるだけ収蔵庫と同じものにしたい。予定では、二階建ての構造にして、棚には民具を中心に大量のモノを収納する。もちろんパネルなどで細かな説明はしないが、ここでは思う存分モノに触れ親しんでいただきたいと思う。部分的ではあるが、モノを自由に引き出してみるコーナーも用意しようと考えている。

また、収蔵展示室では、資料整理や復元作業を行うスペースを設け、学芸員や専門家の作業風景を見学したり、実際に体験することができればと考えている。さらに、定期的ではあるが、勾玉づくりや絵馬づくり、しめ縄づくりなどのワークショップを開催する予定でいる。つまり、先の「オープンギャラリー」が企画展示の体験であるなら、ここではそれ以外の日常的な博物館の活動を体験できることになる。これまであまり知られていない博物館の裏舞台をじっくりみていただきたいと思っている。

学芸員の意識改革

最後に、リニューアルにあたっての学芸員の意識変革についても述べておかなければならない。これまで学芸員というものの実態は、社会にあまり知られてこなかった。それぞれの専門分野をもった研究者の端くれであり、あるときは博物館のサービスマン、または業務の雑用係のような存在ともいえよう。しかし一方、そうした現実のなかで、じつは学芸員自身がその存在意義をあいまいに考えてきたところがある。いや、そうせざるを得なかったのかもしれない。また、博物館によって学芸員の位置づけや業務内容に大きな違いがあり、一概に論ずることができないことも確かである。

とはいえ、本来、学芸員が目指すべき方向性とは何なのか。これはむずかしい問いではあるが、その答えを出す努力はつづけるべきである。ただ一ついえるのは、学芸員は優れた研究者であればいいだけではないということである。博物館が単なる研究施設でなく、展示や普及事業を通じて利用者とコミュニケーションをはかる場である以上、じつに当然のことである。すぐれた研究を成しとげても、その成果をわかりやすく一般市民に紹介し、普及することに力を注がなければならない。そして、展示に反映させる術をきわめる必要がある。なぜなら、やはりそれが「学芸員」だからである。しかし、この単純で自明なことが、学芸員の意識にあまり浸透していなかったように思われる。

また、研究そのものでも、モノの展示技法やデザイン、分析・保存科学、さらには利用サービス調査など、博物館らしい分野をもっと充実させるべきであると考えている。そのためには、研究成果を発表・評価する場を設けることも大切であり、こうした活動を基盤にして、広く学芸員間のネットワークを構築していきたい。学芸員が「学芸員」として、真に誇りと自信をもてるような環境を自ら作り上げていかなければ、いわゆる「雑芸員」の悲哀から逃れることはできないであろう。

当館のリニューアルの問題ばかりでなく、これからの博物館界の活性化をはかるためにこそ、学芸員の意識改革は何より重要で、根本的な問題と考えている。今後も、多くの方々からご意見をいただき、学芸員としてのあるべき姿を求めていきたいと思う。

なお、以上の内容は、あくまで現段階の構想にもとづき、一学芸員の立場からポイントと思われるところを記したものである。今後、さらに多くの方々にご指導・ご協力いただき、より確かで実りのあるプランへと改めていきたい。

（当館主任学芸員）

滑石製の車輪石

～新収蔵品について～

中司 照世

1

昨年度、福井県立博物館の収蔵品に、多数の新たな品に混じって、滑石製の車輪石1個が加わった。この品は、従来出土しているいわゆる車輪石が緑色を呈し、碧玉（緑色凝灰岩等をも含む）と総称される石材であるのに対して、きわめて珍しく滑石製である。いわば、わが国の古墳時代の遺物の中でも、まことに希有な品といえる。そこで、今回はこの滑石製車輪石を紹介することとしたい。

2

さて、この品は、全形が平板な円環状を呈する、いわゆる円形車輪石である（図1・写真1）。車輪石の通例にそって、環体の形状は内端を厚く、外端を薄く作っている。環体内孔がやや大きく[1]、横断面形における下底面（裏面）が水平面をなし、かつ、その内・外両端部の立ち上がりの角度が直角で、傾斜面をなすのは唯一上面（表面）のみである。

外径12.8～13.0cm、内径7.1～7.3cm、高さ0.8～0.9cm、重さ148.0ｇを測る。材質は、上記のようにいわゆる滑石である。色調は、一部に乳白色の部分もあるが、全体的には灰白色を呈する。各種の石製品に用いられている石材内では、軟質の典型をなす滑石としては、比較的硬質で、光沢をとどめる箇所が多い。

文様帯は、大部分の車輪石と同様に、環体の内・外両側面や下底面は無文で、上面にのみ放射状文を施している。環体上面の縦断面形は、逆「V」字形の山状なす部分と「V」字形の谷状なす部分とを、交互に各32条繰り返して削り出し、鈍い鋸歯状を呈する。ただ、この種の施文では、鋸歯状の上・下両端にあたる箇所に細い沈線も加えるのが一般的であるが、本例ではそれを欠いている。

上面・外側面・下底面という外面は、いずれも磨き仕上げで、研磨痕が残る。けれども、環体内部にあたる内側面のみは、金属製利器の刃痕ではないかと思える削り痕が残る。そのほか、下底面や同部分内端部の一部には、研磨時のかすかな段差やごく細い溝状の痕が残る。

なお、本例は、折損した2片が接合・復原されたものである。また、古墳など埋葬設備への副葬を窺わせる、朱等の付着物はなんら確認できない。

3

ところで、そもそも車輪石とは、古墳時代前期に製作され、ヤマト王権によって各地方の主要首長（豪族）に配布されたといわれる、鍬形石・石釧などの腕輪形石製品三種の内のひとつにほか

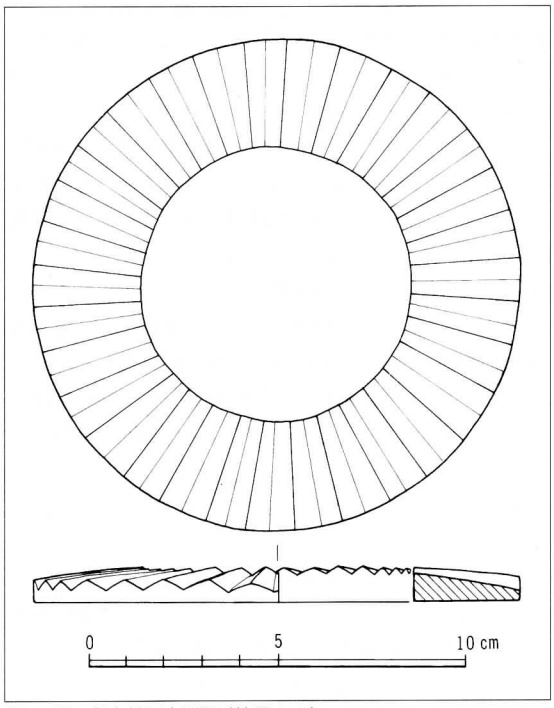


図1　滑石製車輪石実測図（縮尺1/2）

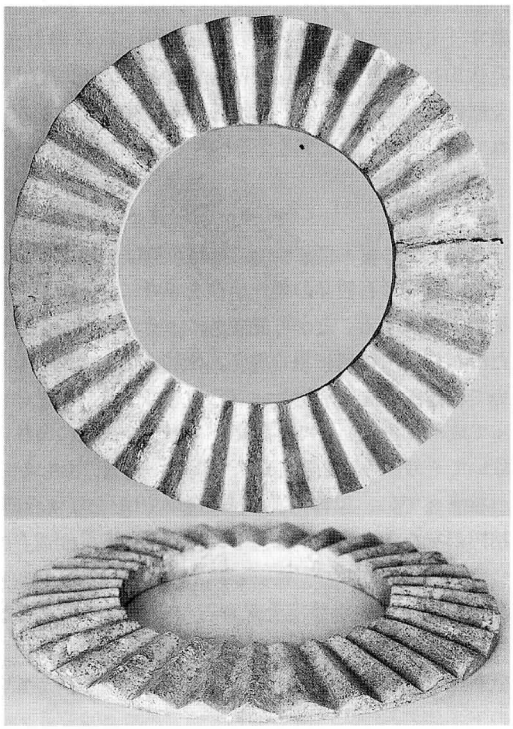


写真1　滑石製車輪石

ならない。腕輪形石製品の原型は、弥生時代に南西諸島で産する貝殻で製作され、貝釧（貝輪）と呼ばれる装身具である。古墳時代には、それが碧玉を主とする石材にも写され、宝器として多数製作されたものである。鍬形石はゴホウラガイ製貝釧が、石釧はイモガイ製貝釧が、ここで対象とした車輪石はオオツタノハ製貝釧が、それぞれ祖型となって、転化したものである。

車輪石については冒頭でも述べたが、これら三種の腕輪形石製品は、いずれもほとんどがいわゆる碧玉製である。ただそれでも、ごく一部にとどまるが、滑石製の品の混在も確認されている。たとえば、鍬形石では滋賀県草津市北谷11号墳出土品（1例）が、石釧では茨城県東茨城郡大洗町鏡塚古墳や伝栃木県佐野市西町屋出土品（群馬県富岡市北山茶臼山古墳からの出土ではないかとする見解がある）[2]・出土地不明品など若干例の存在が知られている。

もっとも、そのほかにも、従来「滑石製石釧」と呼ばれてきたけれども、本来木彫りの腕輪をまねて、石材に写したものと見なす説が提示された滑石製の一群がある。事実、それらは石釧と呼ばれてきたが、石釧とも車輪石とも分けがたい形状を呈し、一般の石釧や車輪石には見られない三角文・斜格子文・櫛歯文・綾杉文などの幾何学的な装飾文様を組み合わせた、特殊な品である。たとえば、奈良市北和城南古墳・奈良県天理市櫛山古墳（図2）・群馬県太田市矢場薬師塚古墳・千葉市七廻塚古墳などの出土品である。

ちなみに、この種の滑石製石釧の一部は5世紀にかかる品であり、この5世紀を中心とする古墳時代中期には、各種の滑石製模造品による祭祀が盛行することからも明らかなように、腕輪形石製品を初め各種の石製品においても、滑石は碧玉よりやや遅れて用いられた石材である。

つまり、今回紹介した例のように、車輪石そのものの形状を呈しながら、しかし滑石製である品の存在は、これまでわが国においては確認されていなかった。その点、まさに滑石製車輪石の初出例といえる。

さらに言えば、車輪石には、今回紹介した品のように外形が円形を呈する円形車輪石と、外形が楕円形を呈する楕円形車輪石との主に二種がある。そして、形状が貝釧に近似する楕円形車輪石が円形車輪石に先行する。これらの車輪石の分布は、中部九州（熊本県宇土市向野田古墳）から北陸北東部（新潟県佐渡郡相川町鹿伏山）・東北南部（福島県郡山市大安場1号墳）に及んでいる。今回紹介した品は、この車輪石分布圏のいずれかの古墳に副葬されていた可能性をまず考えるべきであろう。

4

さて、改めて本例について補足すれば、器表面に残る製作痕や一般の腕輪形石製品の製作手法を参考に、その製作手法や順序を推測・復原することが可能である。それは、まず最初に平板にした滑石材を円盤形に粗く整え、次にその中央部をロクロで刳り貫いて環体内孔を作り出し、さらにその後各部分を金属製利器で削って成形するとともに装飾文をも施し、最後に環体内側面のみを除いてその他の外表面を砥石で磨いて仕上げたものであろう。

参考までに、環体内孔の平面形が円形をなす石釧はもちろん、楕円形をなす鍬形石や、円形と楕円形の内孔が並存する車輪石についても、いずれも環体内孔はロクロ穿孔している。たとえば、石川県加賀市成山遺跡出土鍬形石（未成品）や三重県一志郡嬉野町出土鍬形石は、ともに縦長の楕円形の内孔であって、穿孔後の砥石による研磨によってロクロの回転痕こそ消えているが、内孔の下半部のみは正円形を呈していて、ロクロ穿孔の痕跡が観取できる。同様に、外形のみならず内孔も平面形が縦長の楕円形を呈する楕円形車輪石でも、たとえば広島市安佐北区中小田1号墳出土品では、内孔の上半部のみは正円形を呈していて、ロクロ穿孔の実態が窺える。

なお、「コシ（越）」では、弥生時代から古墳時代（前期）にかけて、盛んに玉作りが行われたことはよく知られている。とりわけ、各種の石製品は、加賀・越前（北部）の両地方で集中的に製作されている。にもかかわらず、古墳からの腕輪形石製品の出土例は、その他の地方に比べて多くない。前期の主要な副葬品のひとつである腕輪形石製品については、配布説に対して流通説なども主張されているが、生産地に所在する首長墳からの出土数が必ずしも多くないということは、配布の事実を如実に示していることにほかなるまい。

すなわち、地方の首長の有する石製品の有無や多寡は、前期ヤマト王権からみた重要度によって配布が左右されたものとみなすべきであろう。近年の調査で、地方としては異例の数の腕輪形石製品19個（車輪石4個、石釧15個）が副葬されていた事実が判明し、学界でも注目を集めた石川県鹿島郡鹿西町雨の宮1号墳の発掘成果は、配布説を補強する有力な新資料である。つまり、後の『日本書紀』の斉明紀六年条などの記録からも時期的に遡及させて類推しうるように、日本海側を北進するには陸路から海路への転換地である能登地方が橋頭堡ともいえ、かつ、出港地としてもきわめて重要な位置を占めていたものと考えられる。それとともに、雨の宮1号墳は同地方の前期の大首長墳であることから、副葬品の豊富さと地理的・政治的な重要性とがまさに符合している。

最後に、福井県内における腕輪形石製品等の関連する副葬例についても、ふれておきたい。貝釧は、古墳時代にも使い続けられているが、福井市龍ケ岡古墳では、碧玉製石釧6個とともに、オオツタノハ製かと思える貝釧2個、イモガイ製貝釧1個が共伴している。また、その近隣の石棺からの出土品の記録（絵図）によって、同市小山谷古墳の副葬品ではないかと推定されている例に、鍬形石1個、車輪石2個、石釧1個などがある。これらの品は現存しないので確定しがたいが、記述内容から碧玉製品と考えられる。そのほか、いずれも碧玉製石釧であるが、敦賀市立洞2号墳から3個が、鯖江市長泉寺山9号墳・福井市今市岩畑3号墳から各1個が、それぞれ出土している。

5

以上、新出の資料で、大変珍しい古墳時代遺物である滑石製車輪石を紹介した。この品の存在が新たに判明したことによって、鍬形石や石釧に止まらず車輪石も加わり、腕輪形石製品三種のいずれにも滑石製品の存在する事実が明確になった。なお、一般の車輪石とはやや異なる点を再度指摘すれば、そもそも石材が異なるという顕著な違いのみならず、環体内孔の径がやや大きく、横断面形における下底面（裏面）が水平面をなすこと、その内・外両端部の立ち上がりの角度が直角をなすこと、鋸歯状の上・下両端にあたる箇所に沈線文が無いこと、などの諸点である。

近年の発掘の増加に伴い、石製品のごく一部ではあるが、北陸や山陰など以外の地方における製作も考えざるをえない[3]資料が散見されるようになった。今回の品に認められる、通有の車輪石との若干の差異が、はたしてそうしたものに由来するものであるか否か、今後の自然科学的分析をも含めた調査の進展に待ちたい。

（当館総括文化財調査員）

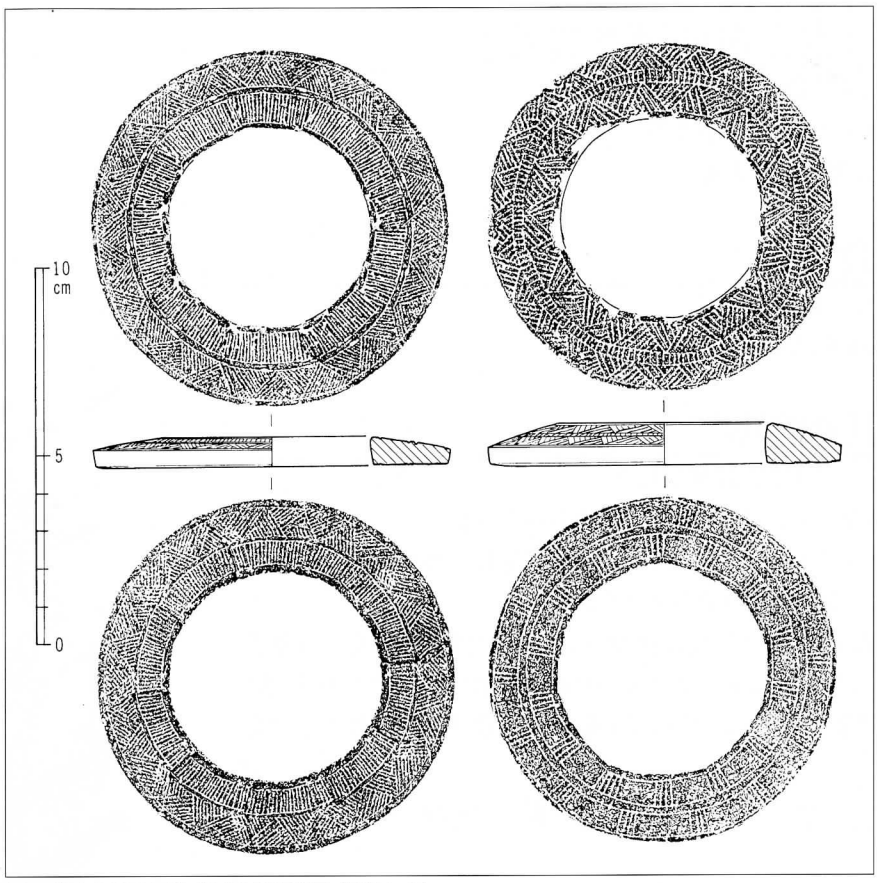


図2　櫛山古墳出土滑石製釧復原実測図（縮尺1/2）

■付記

小文でふれた資料の調査等にあたっては、元名古屋市博物館・安達厚三、聖徳大学・田中新史、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、奈良国立博物館、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井市立郷土歴史博物館、広島市教育委員会などの各氏や各機関のご厚配・ご協力を得ている。明記して謝意を表したい。

■注

①一般の車輪石や石釧では、円形の孔の内径は4cm余りから6cm余りである。

②この滑石製石釧は、古物流通品である。伝西町屋出土品と形状や石材が酷似しており、同じ工房で製作されたいわゆる「同工品」である可能性が強い。また、徳田氏の推定のように伝西町屋出土品が実際には北山茶臼山古墳出土品であれば、同古墳出土で現存が確認されていない今1例の石釧である可能性さえ生じる。

③腕輪形石製品の配布説を支持する立場からすると、一見矛盾するかに見える記述であるが、ごく一部の個性的な品を中心にそうした可能性を残したもので、大部分の品は配布の過程を経て副葬されるに至った、と考えていることにほかならない。

■参考文献

・大場磐雄・佐野大和『常陸鏡塚』国学院大学考古学研究報告第1冊、1956年。
・斎藤　優『足羽山の古墳』1960年。
・上田宏範「櫛山古墳」(『桜井茶臼山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告19、1961年)。
・小林行雄『古墳文化論考』1976年。
・後藤和民『千葉市史　史料編1』1976年。
・福井県教育委員会『北陸自動車道関係遺跡調査報告書　第13集』1978年。
・宇土市教育委員会『向野田古墳』1978年。
・町田　章『装身具』日本の原始美術9、講談社、1979年。
・中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」(『考古学雑誌』第66巻第2号、1980年)。
・潮見 浩ほか『中小田古墳群』1980年。
・鯖江市教育委員会「長泉寺山7・8・9号墳」(『平成元年度　発掘調査報告会(資料)』1990年)。
・徳田誠志「書陵部所蔵の石製品Ⅲ」(『書陵部紀要』第44号、1993年)。
・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター「今市岩畑遺跡」(『第9回　発掘調査報告会（資料）』1994年)。
・郡山市教育委員会『大安場古墳群 第1次発掘調査報告』1997年。
・鹿西町教育委員会『史跡 雨の宮古墳群 整備事業報告書』1998年。

◆穂積和夫イラストレーション原画展「日本の古建築を描く」

10月29日(日)～12月10日(日)

博物館１Ｆ／ギャラリーにて　観覧無料

※月よう日休館・「文化の日」開館

◆記念講演会

「古建築復元画を描く」穂積和夫 氏

10月29日（日）14：00から講堂にて　聴講無料

◆穂積和夫氏の略歴

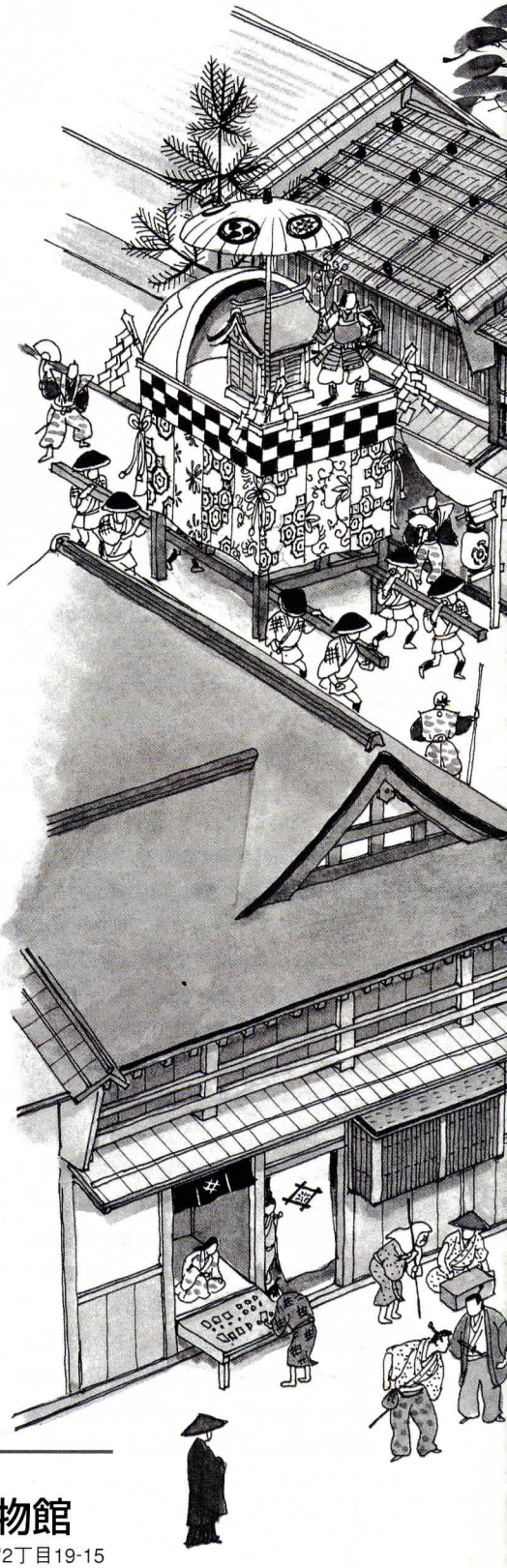
1930年生まれ。東北大学工学部建築学科卒。

松田平田建築事務所をへて、フリーのイラストレーターとなる。

自動車、メンズファッションなどの分野で活躍。近年は、歴史的な町並みや古建築の復元イラストなどに取り組み続けている。

その作品は、『日本人はどのように建造物をつくってきたか（全10巻）』（草思社）イラスト、『とんでもない母親と情けない男の国日本』（マークス寿子 著）表紙イラスト、毎日新聞連載小説「すべて辛抱」（半村良 作）挿し絵などでもおなじみ。

・穂積和夫氏のホームページ（http://www2u.biglobe.ne.jp/~hozkaz/）もご参照ください。



表紙解説

「祇園祭」

1999 © 穂積和夫

室町時代末から江戸時代初期ごろの京都の町並みと祇園祭のようすを描いた復元イラストです。学問的な研究成果を反映した正確な復元画であると同時に、見て楽しく、当時の息吹を感じることのできるイラストでもあります。

建築物だけでなく、祭りを見物する人、鉾を回す人なども描き込まれています。人物の髪形や衣装、商売の店先のようすなども見てください。小間物を売る店先の女性が片膝を立てていることに気がつきましたか？こういった細かい点をじっくり見れば見るほどおもしろくなります。

この作品を含め、『日本人はどのように建造物をつくってきたか（全10巻）』（草思社）から選んだイラスト原画など45点を展示するギャラリー展を10月29日（日）から開催します。博物館で文化と芸術の秋をお過ごしください。

ふくいミュージアム
No.38 2000.9.30発行

FUKUI PREFECTURAL MUSEUM

編集発行
福井県立博物館
〒910-0016 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675(代)